

## 「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

伊藤淳史

### 1 はじめに－問題の所在と本稿の目的－

京都市内の平安時代後期～鎌倉時代を中心とする時期の遺跡からは、製作に用いた粘土帯の積み上げ痕跡を顕著にとどめる独特な鉢形土師器が出土する。発掘に関係する人達の間では、いつの頃からか俗に「塩壺（しおつぼ）」と呼ばれてきた製品である。大量に出土するものではなく、土師器碗皿類に混じってせいぜい1～数点見かけることがある、といった程度の頻度の、目立たない存在であった。

鴨東に位置する京都大学吉田キャンパス構内からも、この俗称「塩壺」は出土している。筆者（伊藤）は、長らく構内遺跡の調査にかかわるなかで、本部構内を横切る古道の白川道（志賀越え道）に沿う地点で、これら俗称「塩壺」が多数出土する状況に遭遇し、他の遺跡と異なる量の多さが気がかりであり続けてきた。のちに詳しくとりあげるが、例えば、コンテナ約400箱が出土したA X 28区の大規模廃棄土坑S K 51の資料を再整理する中では、「厚手鉢形土器」と仮称して19点を報告した〔伊藤・長尾2022 p.113〕。これでもすべてを報告できていない。また、その200m西南に位置するA U 25区の井戸S E 2からは、最低でも11点の出土をみている〔伊藤・梶原2007 pp.138-140〕。

しかしながら、こうした状況を評価しようにも、まずもってこの特異な製品群について、遺物として参照すべき検討がなされた履歴がほとんど見当たらないのである。平安京・中世都市京都においては、土師器皿類の編年研究を中心に著しい進捗をみせてきたが、その過程で、普遍に存在はするが主体を占めることのないこの一群が俎上に載ることはなかった。このたび改訂刊行された『新版 概説 中世の土器・陶磁器』〔日本中世土器研究会編2022〕でも、全く取り上げられてはいない。

したがって、まずはこの俗称「塩壺」と呼ばれてきた一群について、あらためて出土遺跡と報告資料の所在を把握して特徴を整理・明確化し、先行事例のない研究の礎を据える基礎作業を果たしておくことを、最大の目的としたい。平安京・中世都市京都を象徴する土師器皿類とともに有ったとみられる特異品の動静把握は、それら土師器が濃厚に及んだ空間たる鴨東地域の都市化の実態や特質の一端を明らかにする一助ともなろう。

## 2 対象資料の特徴

それではまず、対象となる資料の特徴を明示し、ここで取り扱う範囲をはっきりさせておきたい。京大構内出土の仮称厚手鉢形土器の一群を例示して、包括的な定義付けをしておく（図30）。以下に箇条書きする。なお、形態のばらつきなど細部の異同や例外などについては後の検討で言及する。

- a：土師器の鉢形器形で、口径>底径である
- b：器壁は厚手で5mm～1cm強をはかる（同時期の皿類はおおむね5mm程度以下）
- c：各粘土帯の継ぎ目（積み上げ）痕が、外面を中心に顕著に残される

さしあたり以上の特徴を備えたもので、かつ平安京・中世京都とその周辺域という時空間でもっぱら出土が知られてきたもの、ということになる。とりわけ特徴cは独特であり、若狭湾岸の船岡式をはじめ、古代の製塩土器にも顕著に認められるものであって、外見的に非常に類似している。「塩壺」というような俗称が、誰によっていつ示されたのかを、現状で具体的には明らかにできていないが、こうした製塩資料との外見的類似性が由来となっていることは想像に難くない。次節でその過程を追跡していくことにしよう。



図30 京大構内出土の厚手鉢形土器集合（A X 28区 S K 51およびA U 25区 S E 2 出土品）

### 3 資料認識の過程と問題の所在

京都市域の中世土師器資料は、1970年代に本格化した埋蔵文化財調査により急激に報告例が増加した。さきに、「塩壺」なる俗称の由来は不明としたが、その頃にこの特異な鉢形土器の存在は認識され、関係者間で俗称が広まったと推測できよう。参照すべき検討履歴も見当たらない、とも述べたが、ここでは当該資料の報告文献を遡及してそれらが認識される過程を検証し、そこから研究上の問題把握へと至ることにしたい。

**報告の初見** 管見によるところでは、さきに示した特徴をもつ資料が報告された最初は、名称はともかく、1975年に刊行された左京四条一坊の報告書と把握している〔平安京調査会1975 図版66-E526〕。ただしこの例は、外面に粘土紐積み上げ痕をとどめた鉢ではありながら、脚付というイレギュラーな製品である<sup>(1)</sup>。観察表に特徴の記述はあるが、ほかに格段の言及はない。また、出土した遺構（SK12）は16世紀半ばに位置づけられているが、この資料の年代観としては疑問に思われるものと言える。いずれにしるこれらの問題はあらためてとりあげたい。

典型的な資料の初出としては、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会発行の『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14（1976年10月26日）という青焼きの速報がある（図31）。同書図-15の18, No47地点（烏丸綾小路遺跡）土坑32出土の土師質土器である。図示のみで本文中に記述はない。なお、当該の資料は後年に報告されず、No55地点土坑12出土の別個体が「製塩土器に近い様相をもつ土師器の鉢」「烏丸線内の出土遺物のうちでは類例の少ないもの」として報告されている〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981 p.106図-52〕。

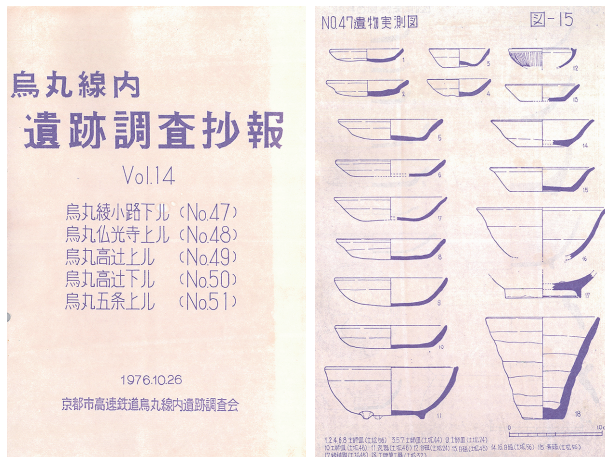


図31 資料が報告された『烏丸線内遺跡調査抄報』の表紙と挿図

**機能の推測と言及** 1976年には、右京区の常磐東ノ町古墳において中世土壙墓群が発掘調査され、翌年刊行の報告書で、中世土師器の中の1点として提示された〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1977 Fig.13-11〕。同書の観察表中には「いわゆる製塩土器といわれるもの」と記述が認められる〔前掲書 p.45〕。よってその頃には、前述したような、外見の類似に由来する機能の推測と呼称が共有されつつあった状況がうかがえよう。

そのような、機能を直接的に示すような「塩壺」の名称が、報告書の器種名として確認されるのは、1978年3月に刊行された吉田近衛町遺跡の報告に際してである〔京都府教育委員会1978 pp.163-211〕<sup>(2)</sup>。同書中の「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」では、土師質土器の器種として「塩壺」が設定され、土坑SK01出土3点、SK04出土1点が示された〔前掲書 第64図23-25, 第71図193〕。そして、本文中では、出土土器群の所属年代を推測する文脈において、「一条大路大土壙で顕著な終末期の瓦器碗が今回の調査では極く少量しか認められていないことや新たに塩壺が加わること等は、後出的な様相であるが、塩壺は近世以降に一般的な型作りのものを含まない。」と言及している〔前掲書 p.181〕。この部分を読む限りでは、近世の焼塩壺と同種の機能をもつ製品としてこれらを見做していたことがわからう。

しかし、器種名として「塩壺」を明示する報告は、上記が最初にしてほぼ唯一となる。同じ頃にまとまった中世土師器資料が報告された同志社キャンパスの常盤井殿町遺跡報告においては、該当する類型は土師質の「鉢」として報告され〔同志社大学校地学術調査委員会1978 図版7-87, 図版8-29〕、以後、他の遺跡でも同様な取り扱いが主流となっていく。ちなみに、京大構内においては、1976年~77年にかけて、病院構内南端の白河北殿北辺想定地が発掘調査され、報告に際して体系的な中世土師器皿の分類と編年が提示されることとなるが〔京都大学埋蔵文化財研究センター 1981〕、この類の鉢の報告はみられない。構内における初出は、さきに例示した一群が出土したAX28区の大規模廃棄土坑SK51の報告であり、鉢としながら、「一般に塩壺といわれているものである」と追記された〔五十川1983 p.12〕。

**製塩土器か焼塩壺か、それ以外か** いずれにしろ、1980年代を迎えるころには、古代末~中世前半を中心とする時期に組成するこの類型の一群を指すものとして、「塩壺」という俗称があまねく普及していたことは確かと思われる。ただし、残念ながらその本来的な役割について、資料から検証する方向性は生まれず、あくまで外見の類似から塩関連資料と推断される状況が継続していった。



## 資料の集成と検討(1)

例えば、古代～中世土器の遺構出土点数が詳細に計量された左京八条三坊の報告書においては、「鉢には、この他に製塩土器に似た組成の一群（494～497）がある。京都で製塩を行っていたと考えるよりは、現時点では大消費地である京都の中から出土していることから塩の容器と類推する方が妥当であると考えている。」との記載が見られる〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1982 p.44〕。また、古代学協会や京都文化財団では、これらの一群を「製塩土器」として扱い、9世紀ごろの本来の製塩土器ととり混ぜて報告されていることもある〔(財)古代学協会1983 p.74, (財)京都文化財団1989 p.23・57・67〕。

こうした状況のなか、山城地域における古代の製塩土器を集成検討した秋山浩三は、「なお、平安京出土品でしばしば製塩土器として報告されることが多い、古代末～中世（主体は一三世紀）の製塩土器に類似した製品は、その性格等は未解決であるが、古代の製塩土器との直接的な系譜はみられず、また胎土も土師器に共通したものであるため本稿では除外する」として、製塩土器と評価しなかった〔秋山1994 p.527〕。また、梅川光隆は、平安時代の史料から二重構造の置き炉の存在を論証しながら、炉に仕掛ける火容製品のうち小型の形態に相当するのがこの鉢形製品であり、曲物内に仕掛けて火桶に用いたとする想定を提出している〔梅川2001 p.122〕。この梅川の想定は、塩関連とする類推以外で唯一の興味深い指摘であるが、残念ながら資料からの検証は深められず今に至っている。

以上、研究史と呼べるものを欠くなか、報告の際の取り扱われ方を中心に瞥見した。頻繁に出土するひとつの類型でありながら、全体像が把握されないまま、類推による機能への言及が散見される状況が続いていると言って良い。以下には、まずは実物資料を集成して出土の実態を時空間的に確認する作業から、はじめていくこととしたい。

### 4. 資料の集成と検討(1)－鴨東地域北半－

**検討対象の資料** 「塩壺」などと俗称され、さきの特徴a～cを示したような土師器鉢形土器について、2011年度末までに報告された事例を、可能な限り抽出集成した。まずはこれらのうち、吉田から岡崎にかけての鴨東地域北半の資料、すなわち、京大吉田キャンパス構内（岡崎地区を含む）出土のすべて実見して確認し得た67点を中心に、他調査機関（京都府教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化市民局・京都文化財団・民間調査団体等）の調査報告から把握できた34点を補った101点で検討をおこない、結果をもとにその後他地域の検討へと進むこととしたい。対象資料は末尾の表に一覧としてまとめ（表2）、報告される地点の位置と点数は（図32）に示した。

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

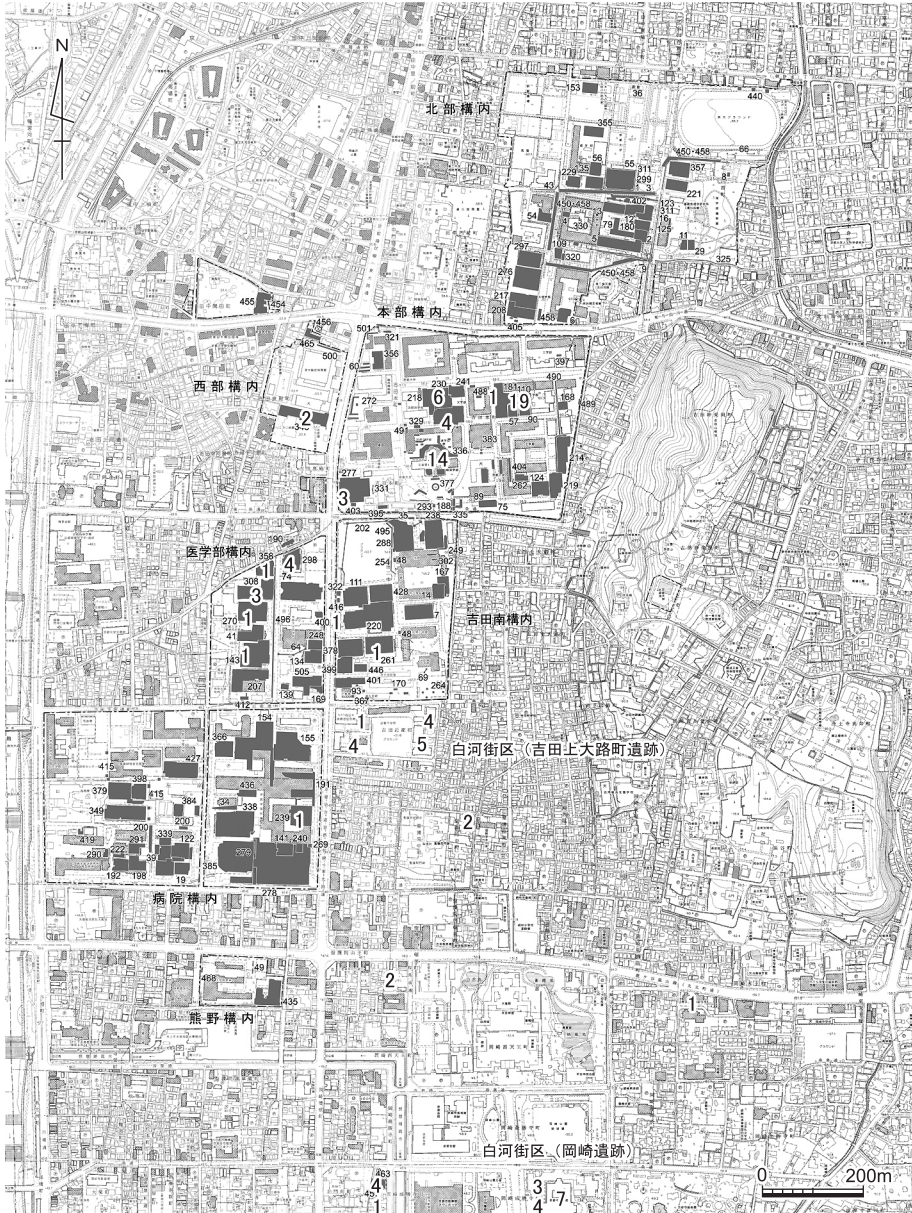


図32 鴨東地域北半の対象資料報告地点と点数 縮尺1/1.5万

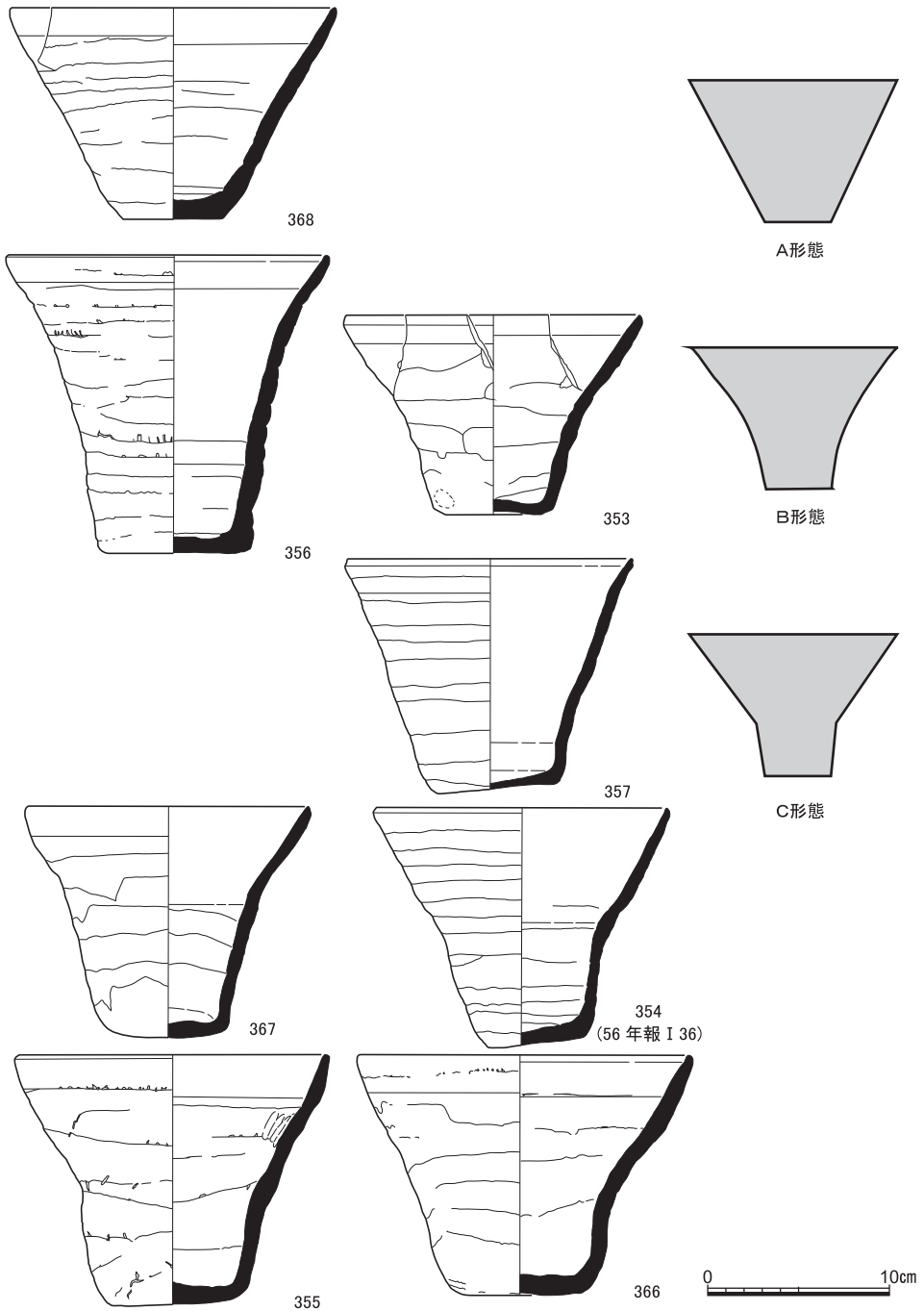


図33 形態の典型模式図と A X28区 S K51出土品 (実測図は縮尺1/4・番号は報告時のもの)

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

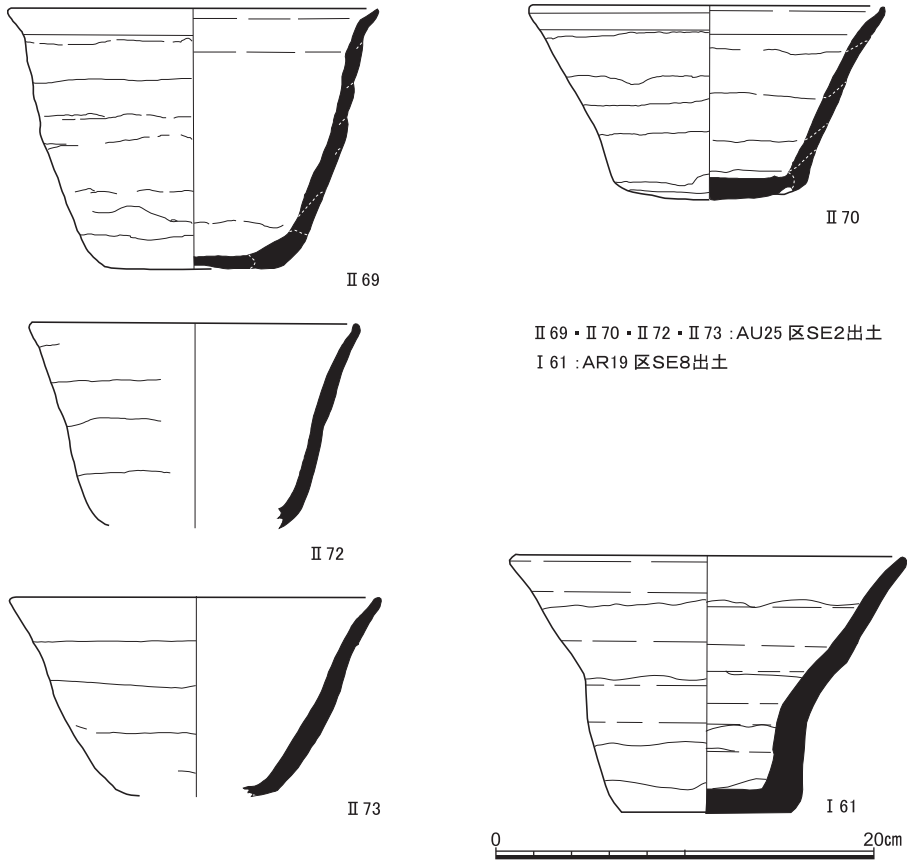


図34 AU25区SE2およびAR19区SE8出土品 縮尺1/4（番号は報告時のもの）

なお、以後の本稿は、土師器皿の編年と暦年代観については〔平尾2019〕を用いる。

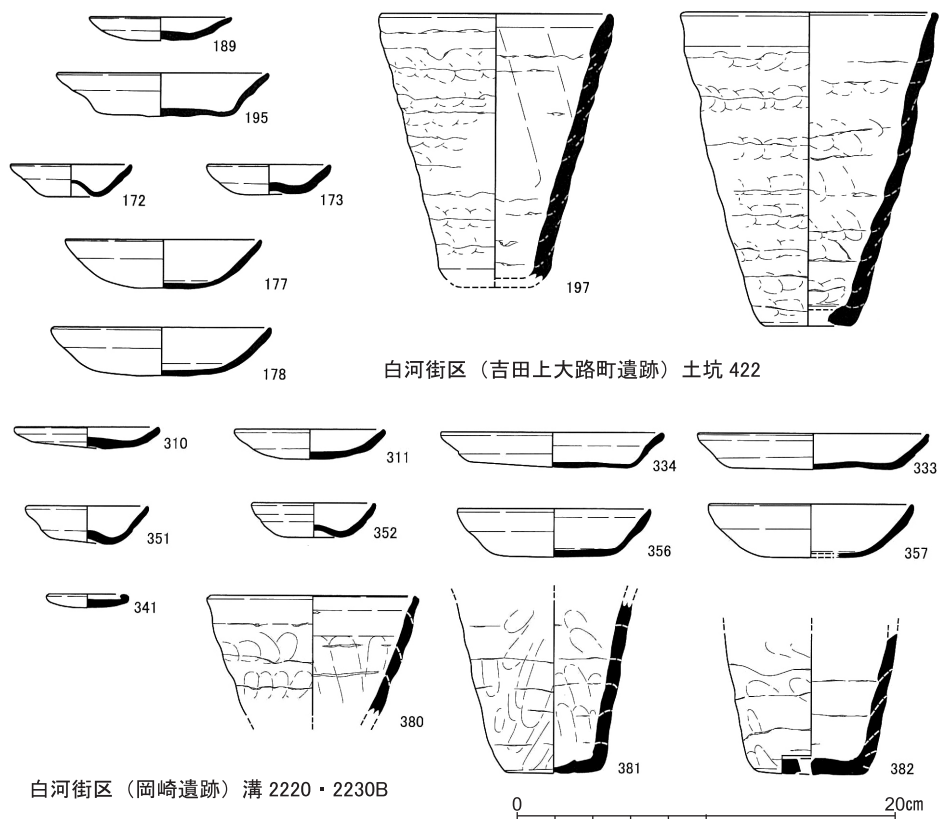
**形態の分類** まずは、京大本部構内のまとまった遺構出土の資料群で、同時期に存在した全形のバリエティを確認する。

さきに「厚手鉢形土器」と仮称して未報告資料を19点紹介した本部構内AX28区の土器溜SK51は〔伊藤・長尾2022〕、土師器皿類は平尾による編年で6B期、おおむね13世紀前葉に比定できるまとまりである。このなかに鉢で全形のわかる資料が9点ある〔前掲書図11〕。これらのプロポーシヨンの変異は漸移的であり、また個体差の幅も大きなものであるが、以下のA～Cの3つで形態の典型を示すことができる（図33）。

A形態：底部から直線的に口縁へと至る逆台形の器形（368）

B形態：底部から全体がゆるやかに外反して口縁に至る器形（353・356）

資料の集成と検討(1)



白河街区（吉田上大路町遺跡）土坑 422

白河街区（岡崎遺跡）溝 2220・2230B

図35 14世紀代の遺構出土資料（吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡）縮尺1/4（番号は報告時のもの）

C形態：底部から途中で屈曲点を有して外反し口縁へと至る器形（上記以外）

傾向としては、A形態と明言できる個体は少なく、B形態とC形態が主体となっている、と評価されよう。

一方、その西南に200m離れたA U25区井戸S E 2出土資料は、平尾の6 A期、12世紀後葉に比定できる〔伊藤・梶原2007〕<sup>(3)</sup>。報告した11点のうち、口縁～底部付近まで遺存してほぼ全形復元可能な個体は4点ある（図34）。これらは、S K51の一群と較べると相違の幅は小さく、底部からのたちあがり直線的となる傾向が強いように感じられるが、わずかながら外反傾向がうかがえるB形態（II 72・II 73）と、直線的なA形態（II 69・II 70）とに区分は可能である。ただし、A形態は底径が大きめで、とくにII 69のような口径との差が少なめであるバケツ状器形は、S K51の一群には認められないといえる。

なお、上記した4点以外の破片資料には、体部に屈曲点をもつC形態とするべきものが



「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

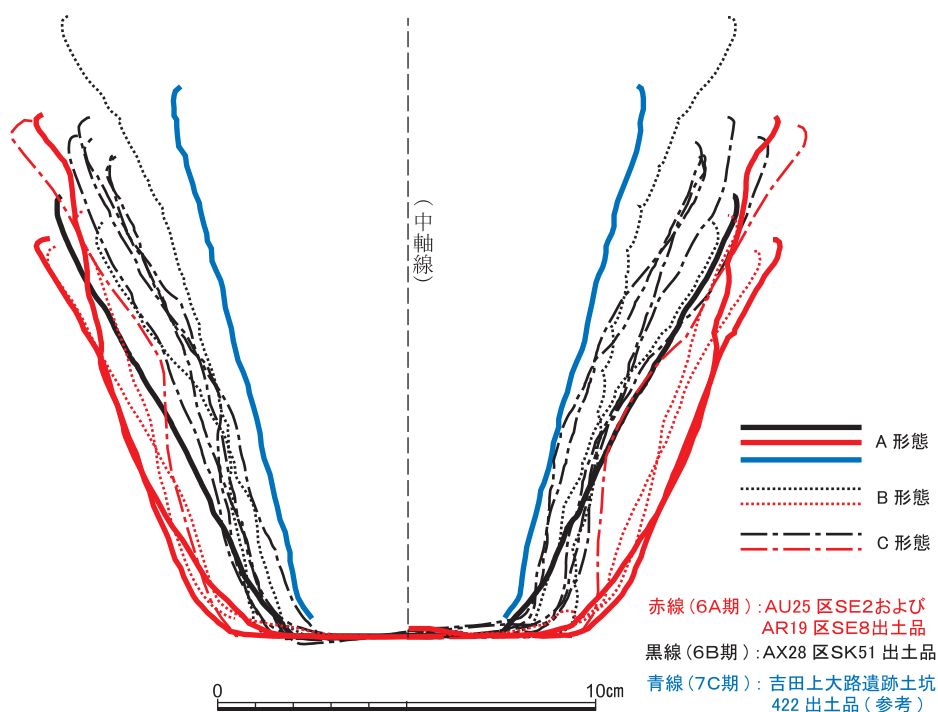


図36 2つの資料群の外形輪郭の比較 縮尺1/2

含まれており、同じ12世紀後葉に比定できる医学部構内AR19区井戸SE8出土資料中にも〔千葉2008 図7〕、全形の把握できるC形態が確認できる（図34-I 61）。したがって、6A期においてもA～Cの3形態のバラエティは同様に認められるとみて良い。暦年代で30～50年程度の時間差がある以上2つの資料群を比較した限りにおいては、A形態の顕在さや底径の大きさに若干の差はうかがわれたものの、形態のバラエティに顕著な違いを認めることはできないといえよう。

上記より時期の下る14世紀代の遺構出土資料について、京大構内では形態の把握できるような複数例のまとまった出土に乏しい。キャンパス外の白河街区（吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡）での出土を参照する限りでは、体部が途中で大きく屈曲するものや口縁部の外反が顕著なものは見当たらず、直線的なA形態に収斂する傾向があるのかもしれない。変遷については後にあらためて述べるとして、ここでは吉田上大路町遺跡土坑422〔（公財）京都市埋蔵文化財研究所2020 図24〕、岡崎遺跡溝2220・2220B〔（公財）京都市埋蔵文化財研究所2017 図版34〕出土例を、相伴土師器皿の一部と例示しておく（図35）。

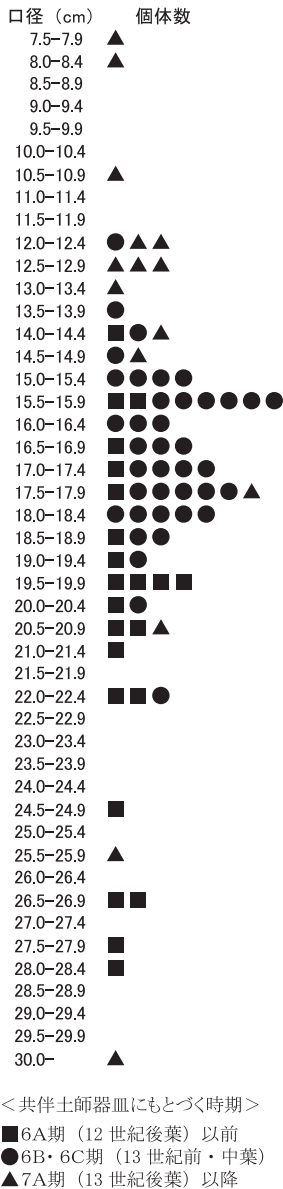


図37 時期別にみた口径の分布

**法量の傾向** 以上みてきたように、形態から時間差による変化の傾向を見いだしていくことは、全形のわかる資料の乏しさから限界がともなう。次には、法量の傾向を中心に検討してみることにしたい。

最初に、上記で対象としたS K51とS E2の資料群に、吉田上大路町土坑422出土品1点を参考に加えた各個体の外形輪郭を、同一縮尺で中軸線を揃えて比較した(図36)。図中の赤線(6A期)と黒線(6B期)について、形態の変異はそれぞれ同様にみられ、上述した評価を裏付けているとともに、明らかに黒線は赤線の内側にまとまっており、法量では時期を経て小型化の傾向があることを示唆している。さきに、底径については大きさの差を指摘したが、実際にサイズをみると、6A期のS E2・S E8は口径19~20cmと底径9cm前後、6B期のS K51は口径15~18cmと底径6cm程度、となっており、口径と底径ともに小さくなっている。ただし、器高については必ずしも低くなっているわけではなく、全体にほっそりしていく傾向、と表現する方がふさわしいかもしれない。このことは、青線で示した7C期(14世紀前~中葉)の吉田上大路町例を加えると、より明瞭となる。

ともあれ、こうした口径の小型化傾向は、同時期の土師器皿類にみられるのと同様な、長期にわたる変化の方向性としても認められるのだろうか。鴨東地域全体の口径の把握可能な資料について、共伴土師器皿の編年に依拠して時期を比定し、口径の時期毎の推移を検討した(図37)。なお時期幅は、最も遡る段階で5B期(12世紀中葉)、最も下るものは8A期(14世紀中葉)である。

6A期(12世紀後葉)以前の資料(■)は23点あり、18cm台以上が17点を数える。6B・6C期(13世紀前・中葉)の資料(●)は39点のうち、15~18cm台に32点が

まとまっている。これらに対して、7A期（13世紀後葉）以降の資料（▲）は15点とやや少く、30cm超の極大品などいくつかばらつきはあるものの<sup>(4)</sup>、14cm台以下が11点を占めており、口径7～8cm台のミニチュア品と呼べるものも出現している。以上の状況から、例外的な事例はあるものの、時期を下るに従い小型化している傾向がある、と認定して良からう。

**口縁部の特徴** 口縁部は、横撫でによって仕上げられており、形態と手法は、基本的に土師器皿類に共通するものが採用されていると良い（図38）。

6B期であるSK51の一群でみると、断面が三角形を呈するように上方に突出する形状、すなわち、端部がつまみ上げられて外端面が形成される一段撫で面取り手法が主体となっている。強いつまみ上げで内傾する外端面が明瞭に形成されるものから（a1）、外端面がやや曖昧なもの（a2）まで、面の形成には強弱がある。つまみ上げもなく、そのまま端部が丸く収められるもの（b）も、存在する。

先行する6A期のSE2の資料も同様な様相を呈しているが、同時期の土師器皿にみられる二段撫で手法と呼び得るような、強い横撫でが重ねられる口縁部はみられない。12世紀中葉の5B期から後葉の6A期にかけて、土師器皿類の口縁形態の変化傾向として、二段撫でが消滅して口唇部に内傾する外端面が形成されていく様相が示されている〔平尾2019 図7〕。これを踏まえると、この厚手鉢形土器が一定程度定型化していく過程が、一段撫で面取り手法が完成していく時期に並行するものと理解されるとともに、この一群の製作者達が、皿類と密接に関連する系譜に連なるものであったことを示していよう。

**底部の形態と輪状圧痕** 底部は、逆台形の鉢形を接地させて支える部位であるにもかかわらず、堅牢や安定を配慮しないづくりが目立つ。体部の全体が厚手の器壁であるせいか、底部も体部とほぼ同じ厚みで造られている。形態を分類すると（図39）、底面をきちんと平坦に仕上げているもの（a1）は少数であり、多くは粗雑に撫でつけられるのみで外縁部は丸みを帯び、平坦面の割合は乏しい（a2）。底面が弱くふくらみを帯びて「半丸底」と呼べるようなもの（b）、完全に丸底化しているものも存在する（c）。なお、S

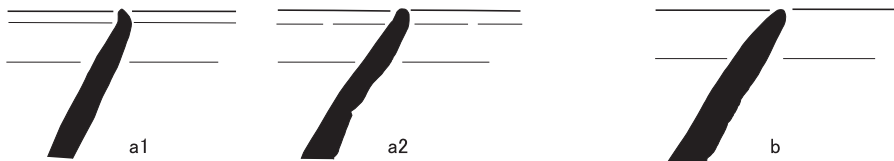


図38 口縁部形態模式図

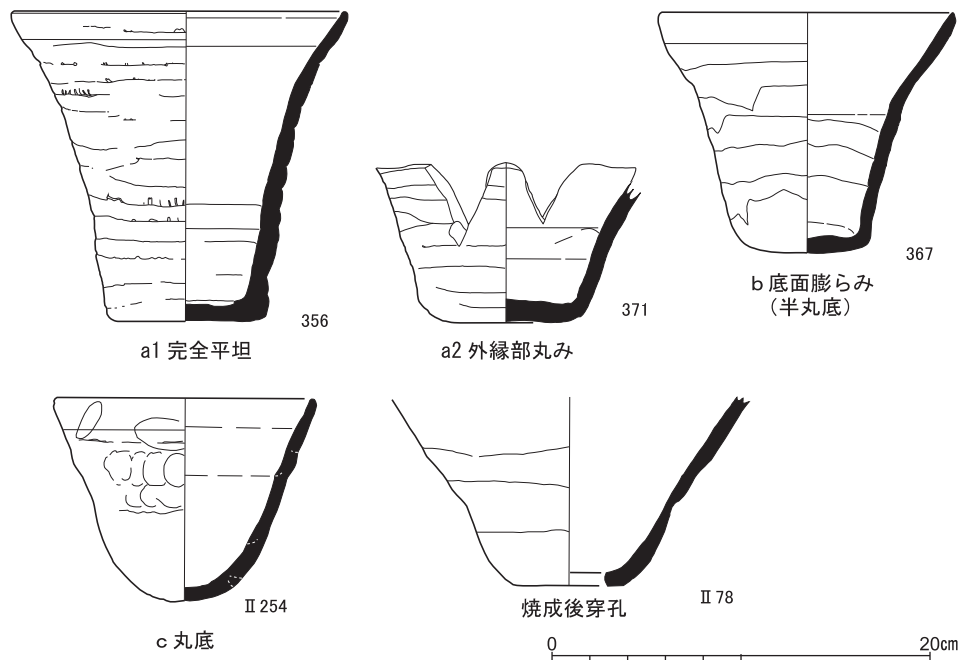


図39 底部の諸形態 縮尺1/4 (番号は報告時のもの)  
(356・367・371A X28区S K51, II78A U25区S E 2, II254A U25区S D14出土)

E 2の資料中には底面に大きな焼成後穿孔を施すものが複数認められる (II78)。機能の問題ともかかわるため、この特徴は後にあらためて取り上げる。

以上のうち、多くの個体の底部に、輪状の圧痕が存在することも注意される (図40)。上述した底部形態のうち、きっちりと平坦に仕上げているものにはいずれも認められないが、それ以外の底部形態では、体部へと立ち上がる屈曲部付近をめぐるように観察される。いずれも直径8cm程度になる圧痕で、深浅や広狭の状態は多様であるが、大別すると、底面周縁に深めにしっかり押されているもの (a種)、浅めの線が底部の周縁をめぐるもの (b種) のほかに、丸底傾向の底部では体部との間が段状を呈しているもの (c種) も認められる。c種の場合、凹んだ型に粘土を押しつけて底部を成形した痕跡と見れなくもない。これらと類似の痕跡としては、時期は異なるが、8～9世紀代に都城周辺で特徴的に存在する人面墨書壺形土器底部の「外型作り成形技法」によるものが想起される [上村1992]。特に、深い圧痕は同種の型作りの採用を推測させるものだが、類似と思われる痕跡について異なる報告もある<sup>(5)</sup>。こうした明瞭な深い圧痕は少なく、深浅がまちまちの痕跡がとどめられていることも考慮すると、型作りに限定できず、大きさの目安となる枠

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

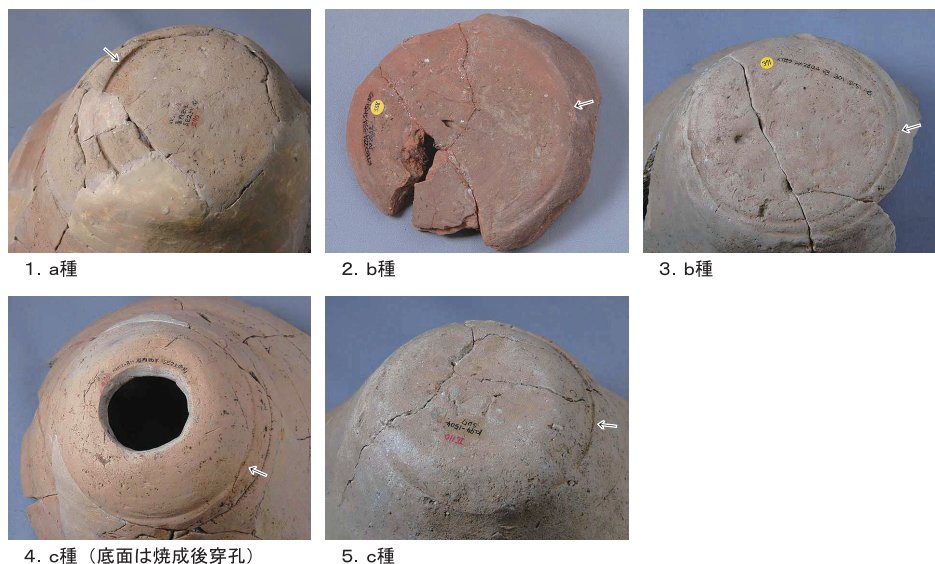


図40 底部の輪状圧痕諸例（→で示したもの）

（2・3：A X28区S K51，1・4：A U25区S E 2，5：A X25区S D 7出土）

のようなものも想定すべきかもしれない。いずれにせよ、この輪状痕跡は、製作技術の系譜を探究する上でも重要な情報といえよう。

**体部の粘土帯積み上げ痕跡** この一群を最も特徴づけている、器面をめぐる粘土帯の積み上げ痕跡である（図41）。6 B期のS K51出土資料にみられるバラエティを示した。幅2 cm程度の広い粘土帯によるものから（1・3）幅1 cmに満たない紐状の粘土帯を用いて十数段積み上げているものまで（同5・7）、多様で漸移的なあり方を認める。6 A期のS E 2出土資料群には、紐状の細い粘土帯を多段に積み上げるものはみられず、幅のある粘土帯が主体となっている。幅の広いものから狭いものへ、ひらたく延ばした帯状のものから紐状のままのもの積み上げへ、という時間的な変化の傾向を想定したくなるが、6 B期以降の資料においても幅の広い粘土帯積み上げは継続して広く認められる。この種の鉢が定着していく過程において、技術的に多様化していったと考える方が自然かもしれない。

具体的な積み上げ方は、粘土帯を時計回りに輪状に巻いたものを、重ね部分の面が内側へと傾斜する内傾接合で積み重ねている。とぐろを巻くように長い粘土帯を多段に巻き上げる例は稀であり、巻き上げても2～3段分程度で、輪積みを併用している。そのため、器面には、水平方向にはしる積み上げ痕以外に、写真に矢印で示した位置にみられるよう



資料の集成と検討(1)

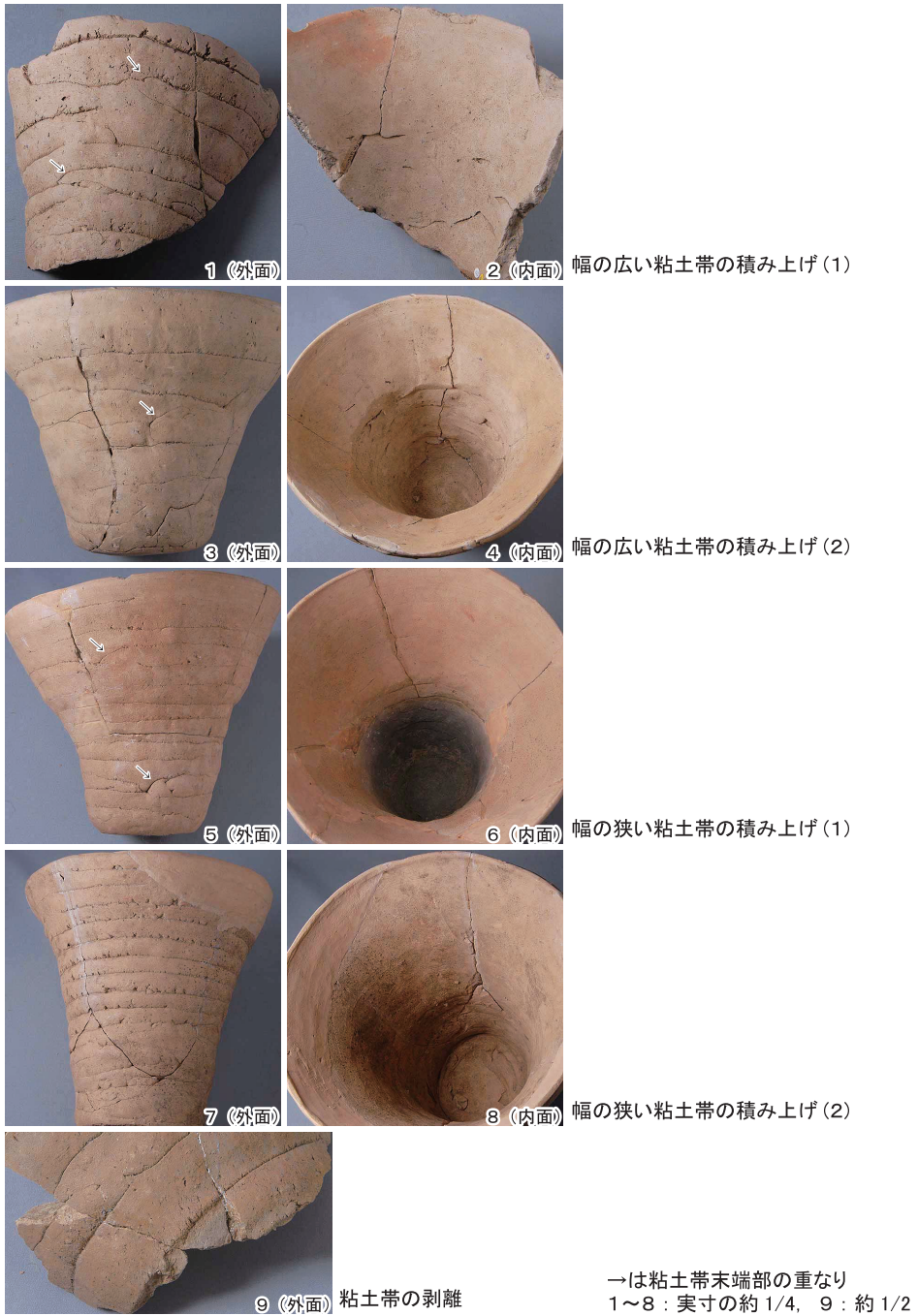


図41 粘土帯積み上げ痕 (いずれも A X28区 S K51出土)

な、粘土帯末端部を示す縦位方向の痕跡も頻繁に残されている。

また内面については、指が届く範囲の上半部のみを撫でにより丁寧に継ぎ目を消して平滑にし、下半部は積み上げが残されていることが通常である（2・4・6・8）。ただし、それらの仕上げ方にも精粗があって、積み上げ痕の残り方は一定していない。

なお、このように外面を中心に粘土帯積み上げ痕は非常に明瞭であるが、その積み上げ部位で剝離破損して、いわゆる「擬口縁」のような状況が確認出来るような事例は多くない（9）。このことは、粘土帯積み上げによる成形が、途中でさしたる休止を挟まずに一気に達成されていることを反映するのではないと思われる。

**使用の痕跡** 実際にどのような用途に供されていたのかについての重要な手がかりとなる使用の痕跡だが、それが確認できる資料は少ない。今回、実資料をつぶさに観察し得た京大構内出土の67点のうちで認められたものを紹介するが、最も多数がまとまって出土しているS K51出土資料中には、顕著な使用痕跡をとどめるものは見つからなかった。

事例として最も多いのは、内面に油煙や煤とみられる黒色物が付着するもので、6点を確認した（図42）。6 A期のまとまった資料S E 2出土品中には、先述したように、底部に大きな穿孔がほどこされるものが複数点存在するが、うち1点には底部に向かって「V」字状を呈するように黒色帯状の油煙痕が付着している（1）。また、底部穿孔の有無は定かでは無いが、帯状に同様な太い油煙痕がめぐるものも存在する（2）。これらは、下部に油入れの容器を据えて組み合わせ、灯火具としたものかもしれない。ただし、焼成後の穿孔であることに鑑みると、転用された状態であった可能性もあろう<sup>(6)</sup>。このほかは、上述の痕跡よりもやや淡い黒色物の付着がみられるもので、内面上半全面をまだらに覆うものや（3）、口縁部付近の両端に小さく付着するもの（4）、等がみられる。内部で火を扱った痕跡ではあるだろう。

なお、外面に厚く煤が付着しているものは4点確認した。うち3点は同一地点（医学部構内A R19区）の出土である（5）。被熱していることは明らかであるが、いずれの資料も内面にこれに対応するような焦げや黒変は確認されず、器表面の剥落が一部にみられるのみにとどまっている。

以上のように、表面的に観察できる痕跡から具体的な使用状況を推測できたものはごく一部であり、それも、本来意図された用途に即していたのかは、定かではない。ただ、被熱にともない激しく劣化したものはみられず、少なくとも製塩作業を行った容器ではない、と断言できるだろう。



図42 器面にみられる付着物事例 (1・2: AU25区SE2, 3: AG20区SE14, 4: AW26区SE3, 5: AR19区SE8出土)

**形態の変遷** ここまでの結果をふまえて、鴨東地域北部について、変遷を作成し提示する(図43)。以上の検討では言及してこなかった、特異例と言える大型品や高台・脚台付の資料についても含ませた(6・7・25・26)。大型品は、口縁が内折する形状のものが一定存在するようである。

総じて小型化している傾向や中世後半期のミニチュア品の出現、体部が直線的な形態へ収斂していくかのような傾向などはうかがえはしたものの、残念ながら、型式学的な組列を組むには至らなかった。あくまで相伴土師器皿の編年に依拠して配列したのみにとどまる。なかでも、12世紀後葉～13世紀前葉頃と14世紀代については、器形の判明する資料が一定量確保されるが、13世紀中～後葉に位置づけられる資料に乏しく、変化をスムーズに追えていない。

鴨東地域北部以外の資料についても、管見の範囲での所在確認は終えている。おおまかな変化の方向性は同じくしていると考えが、時期がより遡るとみられるものやさらに下る資料、起源や系譜を考える上で重要な資料の存在を把握している。また、その空間的ひ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

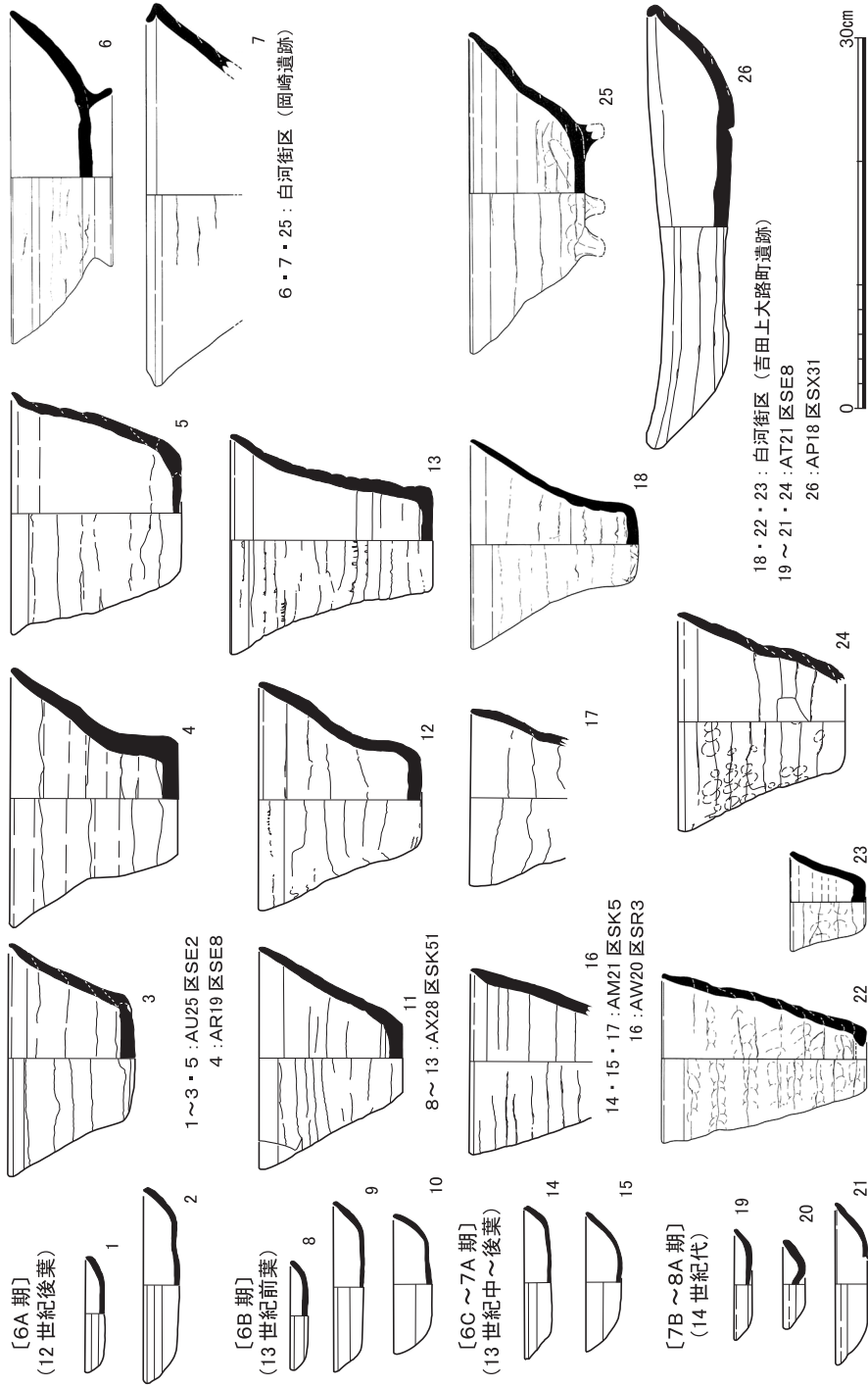


図43 鴨東地域北部における厚手鉢形土器の変遷 縮尺1/6

## 資料の集成と検討(1)

ろがりは、古代末～中世前半期における土師器生産と流通を考える上でも興味深いありようを示している。次節以下、対象地域を広げてそれらの検討を続けていきたい。

また、肝心の機能についても、結論に達していないが、底部穿孔のものや、油煙痕などの記載がみられる報告は、京大構内以外の出土品にも散見されている。焼塩壺と同種の容器であった可能性は皆無とは言えないけれども、口縁の開く逆台形の形態は、この種の容器としてふさわしいとは思われない。こうした問題の検証も、以下に委ねることとするが、さしあたり「塩壺」の俗称ではなく、学術的な報告においては「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案しておきたい。(未完・以下(下)に続く)

### 5 資料の集成と検討(2)-その他の地域-

平安京城 洛東 洛南 洛北 嵯峨野 宇治八幡 その他

### 6 製品の系譜と機能について

### 7 まとめと課題

#### [注]

- (1) 現況では、鳥羽離宮跡第88次調査〔吉崎伸・鈴木久男1985 p.61〕、岡崎遺跡〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2016 図版31-425〕(図43-25)に類例が知られる。
- (2) これに先だって、近世の焼塩壺が「塩壺」として報告されたことはある〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1975 第31図I-14・I-15・I-16〕。
- (3) 報告時には13世紀前葉の一括資料としているが〔伊藤・梶原2007 p.137〕、白色を呈する皿Sとされる類型が出現しておらず、二段撫で手法が一定量含まれる口縁部の法量が9-10cmと14-16cmを主とする内容から、6A期すなわち12世紀後葉と見做すべきと修正する。
- (4) 口径30cm超の極大品は、京大医学部構内A P18区S X31出土品〔伊藤2008 図103-Ⅲ622〕。特徴については後にあらためて触れるが、包含層内で単独出土に近い状態で検出された資料であり、時期は遡る可能性がある。
- (5) 東山区の六波羅政庁跡遺跡の報告において、12世紀中葉の遺構堀100から出土しているこの種の鉢底部に同様な輪状圧痕があり、「土師器皿Nの小型皿の形をそのまま残す」とされている〔(株)文化財サービス2019 図32-65, p.36〕。報告者は、型ではなく別造りの可能性を考えているのであろうか。
- (6) 図35-382に示した岡崎遺跡出土品には、底部に焼成前の穿孔が認められる。ただし使用痕跡については定かでは無い。なお、注(1)で言及した同じ岡崎遺跡の三脚付の製品(図43-25)については、内面に帯状の油煙痕が付着していると報告されている。

#### [引用・参考文献]

秋山浩三 1994 「8京都市府(丹波・山城)」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店



「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

- 梅川光隆 2001 『平安京の器 その様式と色彩の文化史』
- 上村和直 1992 「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』
- 五十川伸矢 1983 「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 伊藤淳史 2008 「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 伊藤淳史・梶原義実 2007 「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 伊藤淳史・長尾玲 2022 「白川道沿いの大規模廃棄土坑－本部構内A X28区S K51の出土資料－」  
『都市近郊地域歴史像の再構築－京都・白川道の研究を基盤として－』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975 『平安京関係遺跡発掘調査概報－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－』
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976 『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 本文編』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 『常磐東ノ町古墳群』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1982 『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊）
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2017 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2020 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－12）』
- 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』
- 京都府教育委員会 1978 『埋蔵文化財発掘調査概報』
- （財）京都文化財団 1989 『吉田近衛町遺跡』（京都文化博物館調査研究報告第4集）
- （財）古代学協会 1983 『平安京左京八条三坊二町』（平安京跡研究調査報告第6輯）
- 千葉 豊 2008 「京都大学医学部構内A R19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 同志社大学校地学術調査委員会 1978 『常盤井殿町遺跡発掘調査概報』
- 日本中世土器研究会編 2022 『新版 概説中世の土器・陶磁器』
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』第12号（（公財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要）
- （株）文化財サービス 2019 『六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡発掘調査報告書』
- 平安京調査会 1975 『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』
- 吉崎伸・鈴木久男 1985 「23第88次調査」（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』

\* 本稿は、2022年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号22K00985（「都市化」とは何か－歴史都市京都近郊における長期的検証－）にかかる研究成果の一部である。

表2 鴨東地域北半における厚手鉢形土器報告資料一覧

京都大学構内(岡崎含む) (本：本部構内, 吉：吉田南構内, 西：西部構内, 医：医学部構内, 病：病院構内)

|    | 調査区   | 地点      | 遺構・層位 | 報告番号    | 口径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 時期 | 文献  | 備考                         |
|----|-------|---------|-------|---------|------------|------------|------------|----|-----|----------------------------|
| 1  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 353     | 17.2       | 5.4        | 11         | 6B | 1,2 |                            |
| 2  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 354     | 15.9       | 5.4        | 13.2       | 6B | 1,2 | 56年報 I 36/図12-5            |
| 3  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 355     | 16.7       | 6.9        | 13.8       | 6B | 1,2 |                            |
| 4  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 356     | 17.5       | 7.8        | 16.4       | 6B | 1,2 | 図41-7・43-13                |
| 5  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 357     | 15.4       | 6.7        | 12.9       | 6B | 1,2 |                            |
| 6  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 358     | 16.2       | 6.5        | 15+        | 6B | 1,2 | 図40-2                      |
| 7  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 359     | 16.2       |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 8  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 360     | 18.8       |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 9  | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 361     | 18         |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 10 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 362     | 18.4       |            |            | 6B | 1,2 | 図41-1                      |
| 11 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 363     | 18.8       |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 12 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 364     | 15.6       |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 13 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 365     | 15         |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 14 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 366     | 17.9       | 6.8        | 13.2       | 6B | 1,2 | 図43-12                     |
| 15 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 367     | 15.3       | 6          | 13.7       | 6B | 1,2 | 図41-3                      |
| 16 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 368     | 17.8       | 5.6        | 11.8       | 6B | 1,2 | 図43-11                     |
| 17 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 369     | 19.4       |            |            | 6B | 1,2 |                            |
| 18 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 370     |            | 6          |            | 6B | 1,2 |                            |
| 19 | 本AX28 | 90・110  | SK51  | 371     |            | 7.6        |            | 6B | 1,2 | 図40-3                      |
| 20 | 本AW27 | 181     | SK7   | I 37    | 18         | 6.8        | 14         | 6B | 3   |                            |
| 21 | 本AX25 | 230・241 | SD7   | II 105  | 18.4       | 6          | 12.4       | 6B | 4   |                            |
| 22 | 本AX25 | 230・242 | SD7   | II 106  | 17.2       | 5.2        | 10.4       | 6B | 4   |                            |
| 23 | 本AX25 | 230・243 | SD7   | II 107  | 17.2       | 6          | 12.4       | 6B | 4   |                            |
| 24 | 本AX25 | 230・244 | SD7   | II 108  | 14.8       | 6          | 11.2       | 6B | 4   |                            |
| 25 | 本AX25 | 230・245 | SD7   | II 109  | 15.2       | 6.4        | 12         | 6B | 4   |                            |
| 26 | 本AX25 | 230・246 | SD7   | II 110  | 16.4       | 6.4        | 8.4        | 6B | 4   | 図40-5                      |
| 27 | 本AW26 | 271     | SE3   | III 131 | 12.4       |            |            | 6B | 5   |                            |
| 28 | 本AW26 | 271     | SE3   | III 132 |            | 5.2        |            | 6B | 5   |                            |
| 29 | 本AW26 | 271     | SE3   | III 133 | 17.6       | 6.4        | 10.4       | 6B | 5   | 内面黒色付着/図42-4               |
| 30 | 本AW26 | 271     | SK10  | III 168 | 17.6       |            | 8+         | 6B | 5   |                            |
| 31 | 本AT21 | 277     | SK44  | I 455   | 15.6       |            |            | 6B | 6   |                            |
| 32 | 本AT21 | 277     | SE8   | I 536   | 17.6       | 6.8        | 13.2       | 7B | 6   | 図43-24                     |
| 33 | 本AT21 | 277     | SX12  | I 562   |            | 4.5        |            | 7B | 6   |                            |
| 34 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 69   | 19.6       | 9.2        | 14         | 6A | 7   | 図43-5                      |
| 35 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 70   | 18.8       | 9.2        | 10         | 6A | 7   | 図40-1・43-3                 |
| 36 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 71   | 23.2       |            |            | 6A | 7   |                            |
| 37 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 72   | 15.6       |            | 13+        | 6A | 7   |                            |
| 38 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 73   | 19.6       | 8          | 10.4       | 6A | 7   | 内面黒色付着                     |
| 39 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 74   | 20.4       |            |            | 6A | 7   |                            |
| 40 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 75   | 14.4       |            |            | 6A | 7   |                            |
| 41 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 76   | 16.8       |            |            | 6A | 7   |                            |
| 42 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 77   |            | 10         |            | 6A | 7   | 内面帯状油煙痕/図42-2              |
| 43 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 78   |            | 6          | 10+        | 6A | 7   | 図40-4・42-1/内面V字油煙痕/底部焼成後穿孔 |
| 44 | 本AU25 | 296     | SE2   | II 79   |            | 9.6        |            | 6A | 7   | 底部焼成後穿孔                    |

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

|    | 調査区            | 地点      | 遺構・層位       | 報告番号    | 口径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 時期  | 文献 | 備考                 |
|----|----------------|---------|-------------|---------|------------|------------|------------|-----|----|--------------------|
| 45 | 本AU25          | 296     | SD14        | II 254  | 13.6       | 2          | 10.4       | 6B  | 7  | 丸底                 |
| 46 | 本AU25          | 296     | SD14        | II 255  | 16.8       | 5.6        | 10+        | 6B  | 7  |                    |
| 47 | 本AU25          | 296     | SD14        | II 256  | 15.6       |            |            | 6B  | 7  |                    |
| 48 | 吉AN22          | 261     | SD12        | I 324   | 22         |            |            | 6B  | 8  |                    |
| 49 | 吉AP21          | 322     | SK2         | III 94  | 12.4       |            |            | 6C  | 9  |                    |
| 50 | 吉AM21          | 399・401 | SK5         | I 394   | 14         |            |            | 7A  | 10 | 図43-17             |
| 51 | 吉AM21          | 399・402 | SX64        | I 604   | 8          |            |            | 7B  | 10 |                    |
| 52 | 西AW20          | 348     | SR3東肩<br>茶褐 | I 651   | 14.8       |            |            | 7A  | 11 | 図43-16             |
| 53 | 西AW20          | 348     | 暗灰色土        | I 746   |            | 6.4        |            | 6A  | 11 |                    |
| 54 | 医AN18          | 143     | SD11        | I 40    | 20         |            |            | 6C  | 12 |                    |
| 55 | 医AO17          | 270     | SX8         | II 412  | 12.8       |            | 8+         | 7C  | 13 |                    |
| 56 | 医AR19          | 298     | SK21        | I 46    | 21.2       |            |            | 6A  | 14 |                    |
| 57 | 医AR19          | 298     | SE8         | I 60    | 20.8       |            |            | 6A  | 14 | 図42-5/外面全体煤        |
| 58 | 医AR19          | 298     | SE8         | I 61    | 20.8       | 8.8        | 13.6       | 6A  | 14 | 図43-4/外面剥落         |
| 59 | 医AR19          | 298     | SE5         | I 175   | 17         |            | 6.8+       | 6B  | 14 | 外面下半煤              |
| 60 | 医AP18          | 308     | SK25        | III 335 | 15.6       |            |            | 6B  | 15 |                    |
| 61 | 医AP18          | 308     | SK25        | III 336 | 15.6       |            |            | 6B  | 15 |                    |
| 62 | 医AP18          | 308     | SX31        | III 622 | 36         | 20         | 5.6        | 7B? | 15 | 図43-26/口縁内折大形      |
| 63 | 医AQ18          | 358     | SE22        | II 413  | 12.8       |            |            | 8A  | 15 |                    |
| 64 | 病AG20・<br>AF20 | 239・240 | SE14        | II 89   | 19.2       | 6          | 16.2       | 6A  | 16 | 図42-3/<br>内面上半黒色付着 |
| 65 | 岡崎ZS23         | 463     | SX10        | I 385   | 19.6       |            |            | 6A  | 17 |                    |
| 66 | 岡崎ZS23         | 463     | SX22        | I 546   |            | 5.6        |            | 6A  | 17 |                    |
| 67 | 岡崎ZS23         | 463     | SP2         | I 655   | 22.4       |            |            | 6A  | 17 | 口縁内折               |

白河街区跡（吉田上大路町・吉田近衛町）

|    | 遺跡名        | 遺構層位   | 挿図 | 報告番号 | 口径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 時期 | 文献 | 特徴備考       |
|----|------------|--------|----|------|------------|------------|------------|----|----|------------|
| 68 | 吉田近衛町      | SK01   | 64 | 23   |            | 3.2        | 10+        | 7C | 18 |            |
| 69 | 吉田近衛町      | SK01   | 64 | 24   |            | 4          | 10+        | 7C | 18 |            |
| 70 | 吉田近衛町      | SK01   | 64 | 25   |            | 4.8        | 6+         | 7C | 18 | 内面黒灰色      |
| 71 | 吉田近衛町      | SK04   | 71 | 193  |            | 4.8        | 10+        | 7C | 18 |            |
| 72 | 吉田近衛町      | S359   | 50 | 20   | 12.6       | 5.4        | 12.6       | 7B | 19 |            |
| 73 | 吉田近衛町      | S359   | 50 | 21   |            | 6          |            | 7B | 19 |            |
| 74 | 吉田近衛町      | S112   | 23 | 44   |            |            |            | 7A | 19 |            |
| 75 | 吉田近衛町      | S538   | 64 | 45   | 14.1       |            |            | 7C | 19 |            |
| 76 | 吉田<br>上大路町 | 1区集石90 | 21 | 129  | 16.7       | 6          | 13.5       | 6C | 20 | 図43-18     |
| 77 | 吉田<br>上大路町 | 土壙墓201 | 19 | 38   | 17.4       |            |            | 6A | 21 |            |
| 78 | 吉田<br>上大路町 | 土壙墓201 | 19 | 39   | 17.8       |            |            | 6A | 21 |            |
| 79 | 吉田<br>上大路町 | 土坑422  | 24 | 197  | 12         |            | 14+        | 7C | 21 | 図35        |
| 80 | 吉田<br>上大路町 | 土坑422  | 24 | 198  | 13         | 4.6        | 16         | 7C | 21 | 図35/図43-22 |
| 81 | 吉田<br>上大路町 | 井戸203  | 25 | 238  | 7.7        | 4          | 6.1        | 7C | 21 | 図43-23     |

表 2

白河街区跡（聖護院・岡崎）

|     | 地点名         | 遺構層位            | 挿図   | 報告番号 | 口径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 時期 | 文献 | 特徴備考                  |
|-----|-------------|-----------------|------|------|------------|------------|------------|----|----|-----------------------|
| 82  | 天王町         | 井戸75            | 53   | 224  |            |            |            | 8A | 22 |                       |
| 83  | 聖護院中町       | SX91下層          | 16   | 216  |            |            |            | 5B | 23 |                       |
| 84  | 聖護院中町       | SE80            | 18   | 254  | 18         |            |            | 6C | 23 |                       |
| 85  | 聖護院<br>円頓美町 | 落ち込み<br>2290    | 39   | 64   | 22         | 9          | 12         | 6A | 24 |                       |
| 86  | 聖護院<br>円頓美町 | 溝1050           | 40   | 90   | 26.9       | 16         | 8.2        | 5B | 24 | 図43-6/高台付鉢            |
| 87  | 延勝寺跡        | 整地層2            | 18   | 46   | 24.8       |            | 6.1+       | 5B | 25 | 外面煤                   |
| 88  | 美術館2期       | 溝840            | 図版31 | 424  | 20.7       |            | 9.1+       | 8A | 26 |                       |
| 89  | 美術館2期       | 溝840            | 図版31 | 425  | 25.6       | 10         | 10.4+      | 8A | 26 | 図43-25/<br>三脚付内面帯状油煙痕 |
| 90  | 美術館2期       | 溝900            | 図版27 | 246  | 27.5       |            | 7.5+       | 6A | 26 |                       |
| 91  | 美術館3期       | 土坑2316          | 図版30 | 108  |            | 8          | 9.5+       | 6A | 27 |                       |
| 92  | 美術館3期       | 溝2220・<br>2230B | 図版34 | 380  | 10.8       |            | 6.3+       | 7C | 27 | 図35                   |
| 93  | 美術館3期       | 溝2220・<br>2230B | 図版34 | 381  |            | 5.2        | 9.1+       | 7C | 27 | 図35                   |
| 94  | 美術館3期       | 溝2220・<br>2230B | 図版34 | 382  |            | 6          | 7.4+       | 7C | 27 | 図35/底部焼成前穿孔           |
| 95  | 美術館4期       | 溝2092           | 図版52 | 39   |            |            |            | 6B | 28 | 胴部墨書                  |
| 96  | 美術館4期       | 溝2094           | 図版53 | 113  |            | 7.3        | 7.8+       | 5B | 28 |                       |
| 97  | 美術館4期       | 溝2094           | 図版53 | 114  | 19.7       |            |            | 5B | 28 |                       |
| 98  | 美術館4期       | 溝5140<br>東護岸    | 図版55 | 198  | 15.5       |            |            | 6A | 28 |                       |
| 99  | 美術館4期       | 溝5140           | 図版55 | 231  | 26.6       |            |            | 6A | 28 |                       |
| 100 | 美術館4期       | 溝5140           | 図版55 | 232  | 28         |            |            | 6A | 28 | 図43-7/口径内折大型          |
| 101 | 美術館4期       | 溝5140           | 図版55 | 233  |            |            | 9          | 6A | 28 |                       |

\*口径・底径・器高は基本的に報告書の挿図より計測したが、観察表に記載のあるものはその数値を採用した。  
+はそれ以上の数値が見込まれることを示す。

\*時期は、出土遺構の共存土器皿類等を〔平尾2019〕により比定した。

報告文献（番号は表2と対応）

- 1 五十川伸矢1983「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和53年度』  
伊藤淳史・長尾玲2022 「白川道沿いの大規模廃棄土坑－本部構内A X28区S K51の出土資料－」『都市近郊
- 2 地域歴史像の再構築－京都・白川道の研究を基盤として－』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 3 五十川伸矢・千葉 豊・伊東隆夫1992「京都大学本部構内A W27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1988年度』
- 4 古賀秀策1999「京都大学本部構内A X25・A X26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1995年度』
- 5 千葉 豊2003「京都大学本部構内A W26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 6 千葉 豊・阪口英毅2006「京都大学本部構内A T21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』
- 7 伊藤淳史・梶原義実2007「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 8 千葉 豊・阪口英毅2005「京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 9 伊藤淳史2009「京都大学吉田南構内A P21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2004～2006年度』
- 10 伊藤淳史・富井眞・内記理2016「京都大学吉田南構内A M21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2014年度』

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

- 11 伊藤淳史・笹川尚紀2012「京都大学西部構内A W20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2009年度』
- 12 五十川伸矢・宮本一夫1988「京都大学本部構内A N18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和60年度』
- 13 伊藤淳史2003「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 14 千葉 豊2008「京都大学医学部構内A R19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 15 伊藤淳史2008「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 16 千葉 豊2000「京都大学病院構内A G20・A F20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』
- 17 伊藤淳史・富井眞ほか2021「京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ」『京都大学構内遺跡調査研究年報2019年度』
- 18 平良泰久ほか1978「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』（京都府教育委員会）
- 19 （財）京都文化財団1989『吉田近衛町遺跡』（京都文化博物館調査研究報告第4集）
- 20 （財）京都市埋蔵文化財研究所2012『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3）
- 21 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2020『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12）
- 22 （財）京都市埋蔵文化財研究所2005『白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4）
- 23 新田和央2019「V 白河街区跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』（京都市文化市民局）
- 24 （株）イビック関西支店2013『白河街区跡・岡崎遺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（イビック京都市内遺跡調査報告 第5輯）
- 25 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-2）
- 26 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2016『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17）
- 27 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2017『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-17）
- 28 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2018『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16）